

2026年1月・2月

165号

日本のお正月の文化と風習



幼い頃から日本とその文化に憧れを抱いていた私は、その思いに導かれて、今年インド日本学生会議（IJSC）に参加しました。そこで出会ったのが、大阪出身の友人の彪雅（ひょうが）君です。私たちはお互いの文化やお祭りについてたくさん話し合い、特に私が興味を持ったのは、日本でどのように新年を迎えるのかということでした。彪雅君は、日本の年末年始の雰囲気について、生き生きと語ってくれました。日本でもインドと同じように、クリスマスの頃からお祝いムードが始まります。街路や木々はイルミネーションで飾られ、寒い冬の夕暮れの中で街全体が美しく輝くそうです。また、クリスマスには多くの人がKFCのフライドチキンを食べるという話も聞き、驚きました。

日本では、新年を「お正月」と呼びます。元日には、彪雅君は家族と過ごすため、幼年期を過ごした福島の実家に帰り、両親や祖父母に会うそうです。自分の経験を共有したいという熱意から、彼はお正月の伝統的な飾りである「門松」について教えてくれました。門松は竹や松、藁などで作られた美しい飾りで、祖先の靈や幸福、繁栄を迎えるために、家の門の前に一対で置かれます。

さらに、12月31日の深夜には、日本全国の仏教寺院で鐘を108回鳴らす「除夜の鐘」の儀式が行われることも教えてくれました。この108回の鐘は、人間の108の煩惱を象徴しているそうです。新年のごちそうには、「おせち料理」と呼ばれる、甘いもの、酸味のあるもの、塩味の料理などを詰め合わせた特別な料理が用意されますが、その内容は地域によって異なるそうです。また、彪雅君は「鏡餅」についても紹介してくれました。鏡餅は、丸いお餅を重ね、その上にみかんをのせた、伝統的な正月飾りです。

彪雅君は今年の元日に、「年賀状」を送ってくれるとも言ってくれました。その心温まる気持ちに、子どもの頃、友達のために年賀状を買っていた思い出がよみがえりました。いつか私も、日本で大晦日と新年を迎えてみたいと、強く思っています。

アディティヤ・プラサード | 和訳：リティカ・ムカルジー

火中の栗を拾う

阿部櫻子さんとの面会



阿部櫻子さんは最近、最新のドキュメンタリー映画『パルヴァティ・バウル－黄金の川を渡る』を持って、第4回コルカタ世界映画祭に参加するためコルカタを訪れました。おめでとうございます。この映画は、最優秀ドキュメンタリー作品賞の審査員特別賞を受賞しました。私たちは彼女にインタビューしました。彼女はベンガル語、ヒンディー語、英語をとても上手に話します。

Q：将来的には、長編映画の監督もしたいと思いますか。

A：私は24年間、ドキュメンタリー映画を作っていました。はい、将来は長編映画を監督したいと強く思っています。でもその前に、バウルと日本の茶道（茶の湯）について、もっとドキュメンタリー映画を作りたいです。

Q：シャンティニケタンに滞在したそうですね。

A：1992年にインドに来ました。最初はビハール州に住み、ミティラー大学（ダルバンガ）でミティラー絵画

（マドゥバニ絵画）を学びました。でも、ビハールでの生活に慣れませんでした。そのため、インド古典舞踊を学んでいた日本人の友人について、シャンティニケタンに移りました。

Q：でも、なぜミティラー絵画を選んだのですか？

A：東京でミティラー絵画の展覧会を見ました。そこで、インドの有名なミティラ画家で、パドマシュリー賞を受賞したゴダワリ・ダッタさんに会いました。彼女の作品は、高松にあるミティラ美術館や、福岡アジア美術館で展示されていました。代表作の一つ「トリシュル（三叉の槍）」は、日本の美術館にあります。私はその作品にとても感動し、すぐにビハール州へ行って、ミティラー絵画を学ぶことを決めました。

Q：パルヴァティ・バウル（ムシュミ・パリアル）との最初の出会いは？

A：シャンティニケタンでヒンディー語を勉強していたときのことです。そこにはミティラ絵画のクラスがなかったので、私は借りた家に住んでいました。その頃、パルヴァティ（当時はムースミ・パリアルという名前でした）も、住む家を探していました。すると、誰かが「櫻子の家で一緒に住めばいい」と彼女に言いました。こうして、私たちは出会いました。その後、私はバウルの歌や文化、サドハナ（修行の考え方）、そしてグルと弟子の伝統に、だんだん強い興味を持つようになりました。

Q：幼い頃からインドの音楽と文化に惹かれていたんですね。

A：父は弁護士、母は主婦でしたが、二人とも私の情熱をあまりよく思っていませんでした。父は私に理系の道へ進んでほしかったのです。しかし私は、東京の玉川大学農学部を中退し、ヒンディー語の専門学校で、ヒンディー語を学んだのちにインドへ行くことを決めました。一番最初のきっかけは、漫画家・手塚治虫の『ブッダ』を読んだことでした。そこから、インドの文化に強く惹かれるようになりました。子どもの頃から、私は「人はなぜ生きるのか」と考えていました。その後、日本の山や巡礼、仏像、スンダルバンの蜂蜜採り、オリッサ州のラタ・ヤトラなど、たくさんのドキュメンタリー映画を作っていました。2019年には、バウルをテーマにした映画『THE PATH』を監督しました。そして今回、パルヴァティ・バウルについての本作を制作しました。

Q：日本の伝統的な宗教団体と、インドのバウル文化に似ている点はありますか？

A：はい。時宗（じしゅう）の文化は、インドのバウル文化ととてもよく似ています。時宗は、日本でも珍しい仏教の宗派です。開いたのは一遍上人（いっはんじゅうにん）です。念佛（阿弥陀仏への祈り）を唱えることを大切にしています。本山は神奈川県藤沢市の正覚寺で、遊行寺という名前でよく知られています。時宗の人々は、阿弥陀仏の力で極楽に行けると信じています。この宗派の一番の特徴は、踊りながら念佛を唱えることです。一方、バウルはインドの精神文化です。決まった教えにしばられず、個人の体験や愛を大切にします。その思いは、歌や音楽、詩で表されます。バウルの人々は、旅をしながら歌と考えを伝える修行者で、とても質素な生活を送っています。このように、音楽、体の動き、旅をする生き方、自由な信仰という点で、時宗とバウル文化はよく似ています。

Q：映画制作以外に趣味はありますか？

A：はい。ハイキング、登山、そして野球を見ることが好きです。



日本に何らかのつながりを持つ人たちが、NKKSに集まり、共通の关心を楽しんでいます。そして、いくつもの集まりを通して生まれる友情や人とのつながりは、やがて一生の大切な宝物になります。これからも心を込めて交流を深め、お互いのこと、そして自分自身の新しい一面を大切にしていきましょう。

NKKS ビジョヤサッメラニ

2025年11月15日（土）



記事は
次号に～

NKKS ピクニック

2025年12月28日（日）



なぞなぞ

- クシュブ・アガルワル

若い時は背が高いけど、年を取ると背が低くなるものって何？



2025年11月・12月のなぞなぞの答
約束



2026年1月10日（土）

午後2時

第6回日本語歌コンテスト

Ramakrishnanada Hall

RMIC

2026年2月22日（日）

午後5時

翻訳のむずかしさ

～プリヤリ・チャクラバーティ

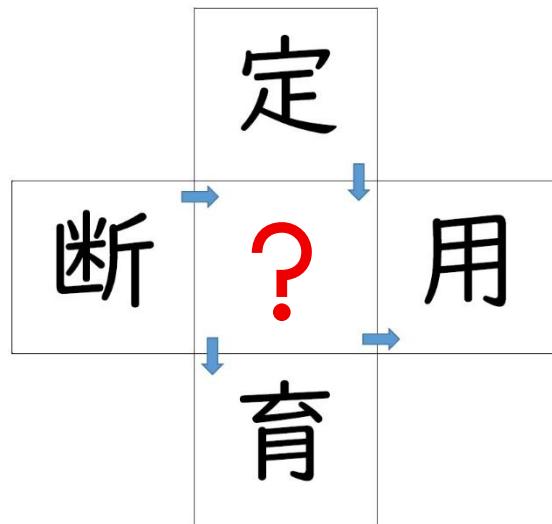
✉ 詳細はメールで送信

ティシュヤグプタさん、2年以上にわたって「Find the Person」パズルにご協力いただき、本当にありがとうございました。これからは、アデシュさんの「穴埋め」コーナーをぜひお楽しみください。

～編集部

穴埋め

- アデシュ・クマール・サフ



真ん中の空いているところに漢字を一つ入れて、そこにある四つの字と組み合わせると、それぞれ意味を持つ単語ができるようにしてください～

有名な人を探してくださいの答え - 2025年11月・12月

殺先生



ビデオを見るためにQR
コードを使用してください！

お正月



こちらへクリック

時間に正確な電車



こちらへクリック

BOOK POST

If undelivered please return to:
NIHONGO KAIWA KYOOKAI SOCIETY
2B, SHIVANGAN 53/1/2, HAZRA ROAD
KOLKATA – 700 019